# さかまた

鴨川シーワールド　NO. 39

## シーワールドのアニマル達

### ●イワトビペンギン

南極周辺に生息する４種類のペンギンを展示しているペンギンズ ネイチャーの中で、一番小さなペンギンを探してみて下さい。体重約３kg、体長40cm程の４羽のイワトビペンギンが見つかるはずです。小さく丸みのあるクチバシ、ルビーの様に赤くキリッとした眼、頭に派手な飾り羽をつけ、その名の通り岩から岩へ、両足をそろえてピョンピョンと飛び跳ねながら移動します。自然界では、切りたった崖の上などに巣を作るため、荒波が打ち寄せる岩の急斜面をもよじ登るといわれています。その習性はペンギンズ ネイチャーの中でも観察され、他のペンギン達のよちよち歩きでは登れそうもない岩の上に、すまして立っていることがあります。しかし、彼らも時には着地に失敗し、しりもちをつく様なこっけいな恰好をします。その姿を見ると、係員も思わず給餌する手をとめて笑ってしまいます。

彼らはかわいらしい外見には似つかわず、攻撃的な性格を持っていて、自分の行く手をはばむ相手に対しては、たとえ自分よりはるかに大きなオウサマペンギンであっても、キュルキュルッとかん高い声を響かせ攻撃します。小さいからといって、なかなか気を許すことはできません。

現在、各々気に入った相手を決めてペアを組み、小石を集めて巣をつくり、産卵の準備を始めています。小さなペンギン達が親子で飛び跳ねる姿を見る日も近いことでしょう。　（青田）

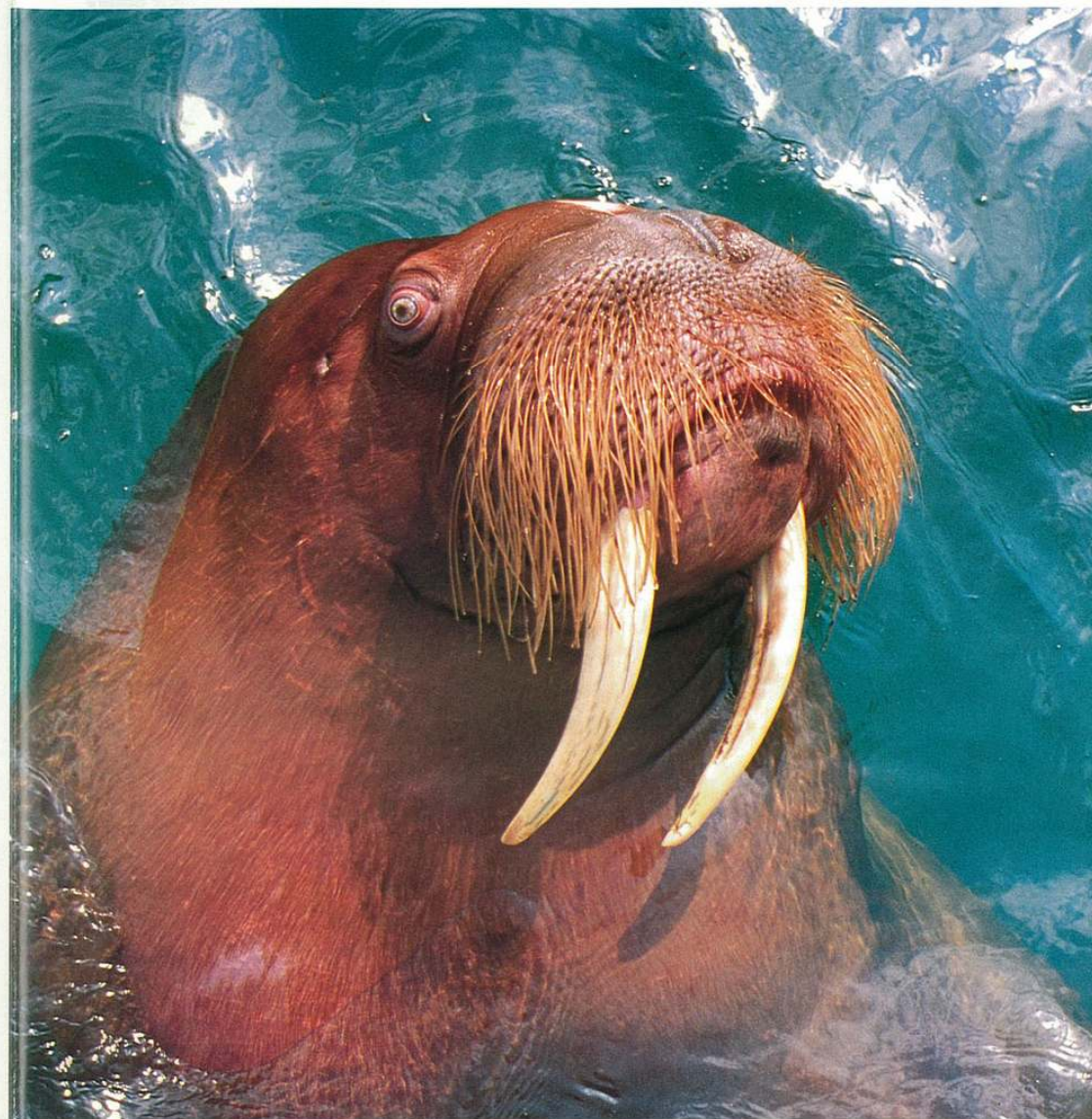
▲イワトビペンギン　*Eudyptes chrysocome*

### ●メダカ

メダカは、ダツ目メダカ科の魚で、北海道を除く日本全国の池、沼、小川などに生息し、全長４cm程の日本最小の淡水魚です。メダカは、昔から子ども達の小川での良い遊び相手として親しまれ、ザッコ、コメンジャコなど日本全国に4680通りもの地方名があると言われています。品種改良されオレンジ色をしたヒメダカは、観賞魚として飼育されるほか、家庭でも簡単に繁殖するため、学校の教材としても飼育されています。

「メダカの学校」と言えば、誰もがよく知っている代表的な童謡で、この歌詞には、メダカが群れて泳ぐ様子がうまく表現されています。メダカが群れをつくるのは、外敵から身を守るための一つの方法と考えられますが、当館のメダカをよく観察してみると、体が大きく強そうなメダカは水面付近の広い範囲を悠々と泳ぎ、小型のメダカは水草の陰に隠れるようにしていて、まるでなわばりを作っているかのようです。そのため飼育係は餌を細かく砕いて全てのメダカに行き渡るように工夫しています。

メダカのようにごく普通に見ることのできた身近な生物も、宅地開発・農薬散布・護岸工事などの環境破壊により、だんだんと姿を消しています。ちなみに鴨川近辺ではメダカを見かけることはほとんどありません。そーっと水槽の中のメダカをのぞいてみて下さい。　（大澤）

▲メダカ　*Oryzias latipes*


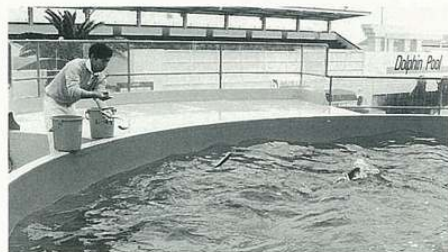

さかまた No.39
（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　平成４年７月

# 動物の餌付けの話

（餌付＝えづ）

▲イワシを頭から口の中に入れるキンメダイ( *Beryx splendens* )の強制給餌

動物を新しく入手し飼育を開始するときにまず行なうことは、新しい環境に馴れさせる「環境付け」、人に馴れさせる「人付け」、そしてエサに馴れさせる「餌付け」があります。

餌付けの方法は、新しく搬入した動物の種類、年齢などによってさまざまですが、本来その種類がどのようなエサを食べているのか、どのような食べ方をするのか、どのくらい食べるのかなどをあらかじめ調べておく必要があります。また自然界と同じエサを与えることが理想ですが、入手できない場合は、エサの大きさ・形・硬さなど様々な工夫を行ない、代用食を与えます。いずれにしても決った餌付けの方法というものはなく動物をよく観察して食べやすい方法を工夫することが大切で、飼育係の腕のみせどころでもあります。

▲エサのサバを投げ与えているカマイルカ (*Lagenorhynchus obliquidens*) の餌付け

**イルカの餌付け**　広い海を泳ぎ回っていた野生のイルカが、プールという新しい環境に馴れるのは大変です。生きた魚を捕まえて食べていたので、餌付けは難しそうに思えます。しかし、搬入したばかりのイルカの泳いでいる目の前に冷凍魚を解凍し投げると、反射的にその魚をくわえ、呑み込んでしまいます。この点ではイルカは餌付けの優等生と言えるでしょう。しかし中にはベルーガやコビレゴンドウといった餌付けの難しい仲間もあり、プールを落水し係員がイルカの口の中にエサを入れて、呑み込む練習をさせることもあります。

▲トド( *Eumetopias jubatus* )が興味を示すまでのガマン比べ

**アシカやアザラシの餌付け**　アザラシの仲間は神経質で収容プールがかわっただけでも落ち着かずエサを食べなくなるほどですから、餌付けは簡単にはいきません。プールの中に生きた魚を入れ食欲をそそってみたり、エサの種類を替えてみたり、また係員が見ていると食べない時にはプールの中にエサを入れて係員は動物に気付かれないように隠れて観察したりと色々な工夫を凝らします。当館に新しく搬入したトドは、なんと35日間もエサに見向きもしませんでした。これだけ長期になると体調が悪いのかとやきもきしますし、死んでしまうのではと心配も募ります。このトドは根気と粘りが功を奏したのか36日目に食べ始め、係員一同胸をなでおろしました。

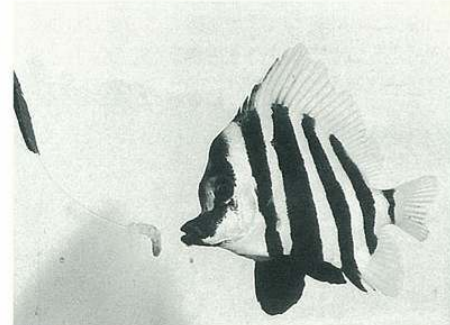


**動物の子ども達の餌付け**　飼育下で繁殖したアシカやペンギンが、何らかの事情で母親が子どもを育てることができない場合、係員が母親代りとなり代用食を与えます。生まれてすぐであれば割合簡単に餌付いてくれますが、母親と子どもの絆が強くなった後ではなかなか係員に懐かず、アシカの場合では哺乳ビンから特製ミルクを上手に飲むようになるまで１週間程かかります。幼い子どもの餌付けは、子どもの体力消耗との時間的な戦いであり、係員は昼夜を問わず動物に対しての愛情という武器でこれに対応します。

▲フンボルトペンギン (*Spheniscus humboldti*) の強制給餌

**サカナの餌付け**　魚は種類も多く一言でかたづけることはできませんが、飼育を始める魚の餌付けは、適した環境（水温や水質など）で飼育を行ない、落ち着いた状態になってから開始することが基本です。

餌付ける時のエサは、その魚の生息している場所、行動、習性、口の形、近縁の種類が食べているエサ、胃内容物の調査結果などを考慮して決めますが、あまりそれにこだわらず、いろいろ与えてみるのが一つのポイントです。

魚が食欲を示すエサの要因としては、エサの動き、色、におい、大きさ、音などいろいろな要素が複雑にからみあうことと、給餌時間（夜行性・昼行性の魚）が関係しています。しかし、飼育する魚も種類によっては、警戒心の強いものとすぐに馴れるもの、同じ種類の魚でも大きく成長した個体のほうがなかなか餌付かないなど一筋縄ではいかないのが実状です。

▲棒の先にエサをつけ口先に触れて行なうテングダイ( *Evistias acutirostris* )の餌付け

ちなみに警戒心の少ない魚の代表はマンボウで搬入翌日よりエサを食べ始め、２日目には係員の手から直接給餌することが可能になった例もあります。反対に警戒心の強い魚はビワコオオナマズ（４ケ月後に餌付く）、コブダイ（３ケ月後に餌付く）が代表でその頑固さには頭が下がります。

餌付けの困難な魚の一つにキンメダイがあげられ、この魚の餌付けには、強制給餌という方法が用いられます。これはキンメダイを傷つけないように取り揚げ、口の中に生きたイワシを頭から呑み込ませる少々荒っぽい給餌方法ですが、何度かこれを繰り返すと自分でエサを食べるようになります。

▲コマッコウ( *Kogia breviceps* )の水中での餌付け

マツカサウオは、エサを良く食べる仲間を同居させると食べ始め、またハシキンメは目の前にエサを急に差し出すと飛びつくなど、魚の習性をうまく利用する方法も使われます。

動物が係員の手からエサを食べるようになれば環境にも、人にも、エサにも馴れたと言うことができ、飼育の第１段階を無事終えたと言ってもよいでしょう。係員も一段落と胸をなでおろしたい時ですが、飼育展示や調教はこれから始まるわけですから、よりよい動物との関係を築く為の第一歩を踏み出したのにすぎないのです。

（勝俣悦・津崎）

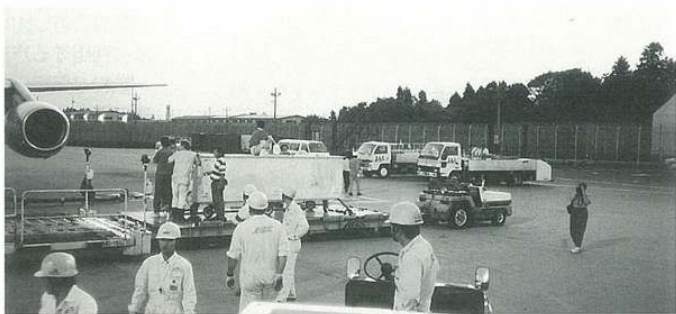
# トピックス ハワイへ オキゴンドウ搬出

▲シーライフパークのスタッフによる輸送前の健康診断

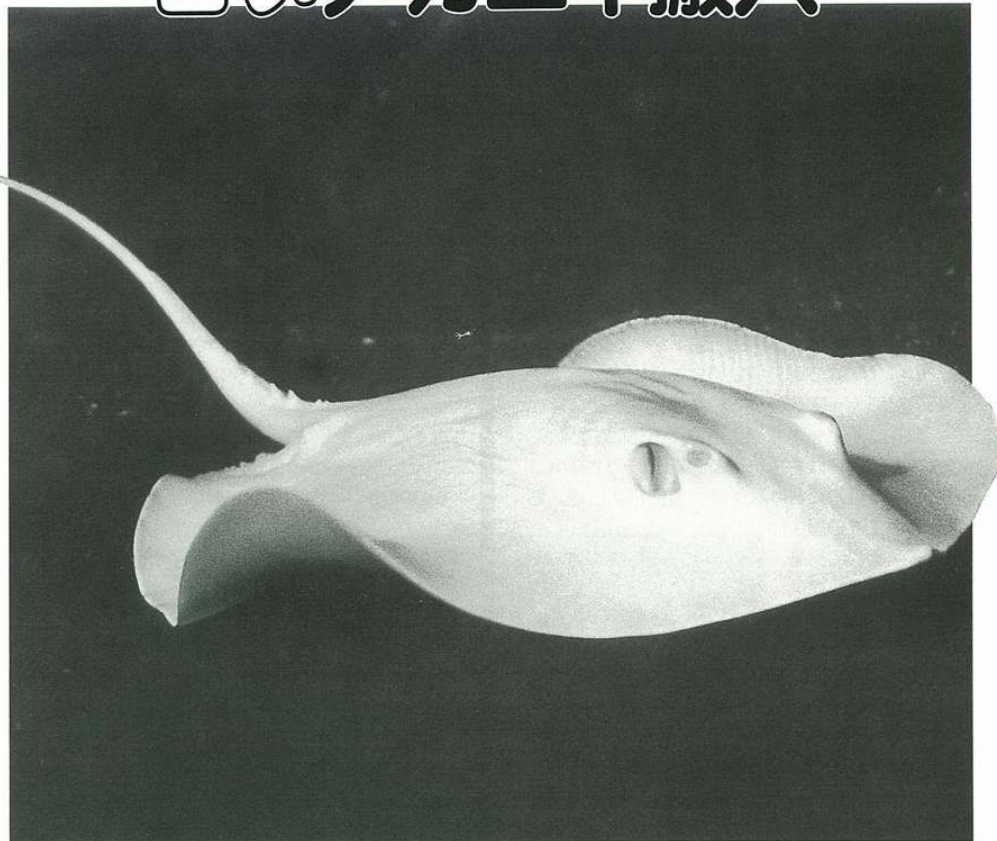
飼育展示動物の入手を目的とした国内での水族館同士の交流はあまり珍らしい事ではありませんが、当館では国内のみならず外国の水族館とも、これまで技術交流の面で数多くの関係をもち、動物交換でも大きな成果を挙げてきました。

3年前当館と姉妹水族館提携を結んでいるアメリカのサンディエゴにあるシーワールド　オブ　カリフォルニアから、ハワイにあるシーライフパークがオキゴンドウを探しているので、協力して欲しいという依頼がありました。早速、当館では、動物の確保はもとより、ワシントン条約（絶滅の恐れのある野生動植物の種の国際取引に関する条約）に基づく輸出申請等の作業を行なう一方、シーライフパーク側でも飛行機手配などの諸準備が綿密に行なわれました。そして何度かのスケジュール変更の末、4月28日にシーライフパークスタッフ7名が付き添い、2頭のオキゴンドウ（シリウス・雄、アーク・雌）は特別チャーター便にてトラブルもなくハワイへ飛び立ちました。

ハワイのオアフ島にあるシーライフパークは、毎年日本人観光客も大勢訪れます。早ければ今年の夏には、ハワイで活躍する鴨川育ちのオキゴンドウのショーが見られるかもしれません。（桐畑）

▲コンテナに収容されるオキゴンドウ
(*Pseudorca crassidens*)

▲成田空港よりチャーター機でハワイへ



# 白いアカエイ搬入

▲搬入された全身白色のアカエイ(*Dasyatis akajei*)色素がないので目は赤い

昨年11月、館山の定置網で全長76cmの白いエイが捕獲されました。調査の結果、眼が赤く全身が白いこのエイは、突然変異により体の色素が欠乏したアカエイのアルビノ（白化個体）であることがわかりました。現在まで、いろいろな動物からアルビノについて報告されていますが、自然界では、体色が白いと目立ちやすく、外敵から狙われやすいなどの理由から、子どものうちに捕食されてしまうことが多く、ここまで大きく成長し発見されるのは極めて稀なことです。

当館に搬入された当時は、警戒心が強いためか15日間もエサを食べずに係員を心配させましたが、その後環境にも馴れ、今では他のアカエイと一緒に元気に水槽の中を泳ぎまわっています。

昔から白蛇・白虎・白獅子・白狐など色の白い動物は、神様の遣いとして縁起が良いと崇められてきましたが、学術的にも貴重なこの白いアカエイも、当館を訪ずれる多くの人々に幸運を運んでくれることと期待しています。（満冨）

**軟骨魚類（サメ・エイの仲間）の白化現象報告例**

| 報告年 | 種類 | 地名 |
|---|---|---|
| 1959 | ウシバナトビエイ属の一種 | アメリカ |
| 1970 | アカシュモクザメ | アメリカ |
| 1972 | トラフザメ | インド洋 |
| 1973 | ホシザメ属の一種 | アメリカ |
| 1976 | ドチザメ属の一種 | アメリカ |
| 1977 | アカエイ属の一種 | アメリカ |
| 1986 | オオテンジクザメ | 和歌山県 |

## ●仔イルカの愛称決定

この春２年前に当館で誕生したバンドウイルカの子ども３頭（メス）にそれぞれ素敵な愛称が決まりました。今年1月1日から２月29日の間に来園された方々から総数3061通もの応募をいただき、選考委員会において厳正な審査が行なわれた結果、ノーマの仔（平成２年６月６日生）に「ユマ」、スリムの仔（平成２年６月26日生）に「カリム」、ヘレンの仔（平成２年７月２日生）に「アノン」と母親の愛称の一字をとり入れた名前に決定しました。現在も子ども達は親イルカと一緒に生活していますが、体長は生まれた時の約２倍の 230 ㎝になり、親イルカに負けないほど成長しました。もうすぐ満２才の誕生日を迎えるこの将来のスター達に私達は大きな期待を寄せています。（斉所）

左:ユマ 中:アノン 右:カリム

## ●新しいキャラクター

当館のシンボルキャラクターとしてすでに皆様に親しまれているシャチの「オルタン」に続き、セイウチの「ロッキー」とベルーガの「シルキー」が誕生しました。「ロッキー」は、長い牙が特徴で愛敬たっぷりのセイウチをモチーフに、「シルキー」は、全身が真っ白でおしゃべり好きなベルーガをモチーフにデザインされたもので、いずれも当館の人気動物がモデルとなっています。

「ロッキー」と「シルキー」は、すでに園内各イベントで、「ぬいぐるみ」として挨拶したり、キャラクターグッズとして園内の売店に登場していますので、今後共「オルタン」同様かわいがってください。

（大屋）

左:ロッキー
右:シルキー

## ●発行された研究業績集(1970〜1991)

当館は1970年10月に開館し、今年で22年目を迎えることができました。日本で初めて飼育されたシャチやシロクジラ、長期飼育に成功したマンボウやキアンコウなど、シーワールドを訪れる多くのお客様に水の生物達の様々な話題を提供し続けています。水族館のもつ社会的機能として、①教育の場　②研究の場　③自然保護啓蒙の場（種の保存）④レクリエーションの場があげられますが、この度、その中で最も地味な研究にスポットを当てた業績集を発行することができました。内容としては、これまでの研究報告をとりまとめたほか、飼育動物・繁殖動物も一覧表として付記し、飼育係員の水の生物に対する情熱と感動を少しでも多くの人々に知ってもらうことを目的としています。

（祖一）

## ●アマモの揺れる水槽

南房総の海岸の藻場を構成する海藻は、内湾の砂泥底に繁茂するアマモと、潮通りの良い岩礁帯に生えるホンダワラ、カジメに大別できます。ここはエサも豊富で外敵から身を隠す場所も多く、いろいろな魚類の稚仔魚が見られるため、さながら海の保育園といえます。今回の改装工事では、広さ９㎡の水槽にアマモ場の雰囲気を水中にかもし出すとともに水面上の岩にフジツボ、カサガイなどの付着生物の再現にも努めました。現在展示しているアマモは、係員自作の人工海藻ですが、近い将来本物のアマモを育成するとともに、水槽の水流をコントロールし、より自然の海に近づけるための工夫を行なっていきたいと考えています。

（津崎）